

仏様のおはなし新シリーズ第100集「『ミリンダ王経』の喻え」

『ミリンダ王経』というお経の中に、ある問答があります。同じ内容が、親鸞聖人が高僧と仰がれた源信和尚の『往生要集』にも紹介されています。
それを端的に言うと、「知つて犯す罪と、知らずに犯す罪と、どちらが罪が重いか?」という問いでです。

世間一般的には「知つて犯す罪が、罪が重い。」と考えるのが普通でしょう。

仏教での受け止め方、考え方はどうも違うようです。

私もこの問答を皆さま方に考えて頂く際にいろいろと考えたことがありました。ヒントです。私のヒントは、「赤ん坊に刃物を持たせたら何故怖いか?」です。まさか、赤ちゃんにリンゴの皮を剥いてくれといつて包丁を渡す大人はいないでしょう。

何故ならば大人は包丁の使い道を知つていて、使い方によつては危険な物と知つているからです。包丁を何かを知らない赤ん坊には、扱わすことも目の前に置くこともしないでしよう。

先ほどの問いに対し、お釈迦様は譬えを説いてお応えになります。

『それは、ちょうど地上に焼けた鉄があるとして、一人は焼けた鉄だと知つてゐるが、他の一人は、焼けていることを知らない。二人がともに手に取つた時、知らなかつた者の手は焼けただれることが大きく、知つていた者の手は火傷がわずかなようなものである。』と。

知らずに犯す罪は、知らないが故にとことん犯してしまうという恐ろしさがあることを教えて下さいます。まさに私の身の事実なのです。

ただ、自らの罪悪性に気づくことは、決してマイナスではなく、人間が人間として生きてい上でもとても大切な営みです。何故なら、罪を恥じ、と同時に悔い改められていく道が開けてくるからです。罪悪を知り続けることで、どこまでもプラスに変えられていく人生が興りうるのでです。

お念佛申す人生は、私の罪悪と共に歩む人生もありました。

